

核燃料サイクル開発機構(旧動力炉・核燃料開発事業団)のあゆみ

年 月	出来事
昭和 42 年 10 月	動力炉・核燃料開発事業団発足
昭和 44 年 5 月	遠心分離法によるウラン濃縮実験に成功
昭和 44 年 12 月	重水臨界実験装置臨界達成
昭和 45 年 3 月	大洗工学センター開設
昭和 47 年 11 月	プルトニウム燃料第2開発室で高速実験炉「常陽」用燃料の製造開始
昭和 52 年 4 月	「常陽」初臨界
昭和 52 年 11 月	東海再処理施設にて、初の国産プルトニウム抽出に成功
昭和 53 年 3 月	新型転換炉「ふげん」臨界
昭和 54 年 10 月	国産自主技術により、硝酸プルトニウム転換技術の開発に成功
昭和 54 年 12 月	ウラン濃縮パイロットプラントで国産初の濃縮ウラン回収に成功
昭和 56 年 1 月	東海再処理施設本格運転開始
昭和 56 年 10 月	我が国初の国産プルトニウムの燃料で「ふげん」発電開始
昭和 59 年 9 月	「常陽」使用済燃料から回収したプルトニウムを用いた燃料を再装荷した「常陽」が臨界となり、我が国はじめてのFBR燃料サイクルの輪が完成
昭和 63 年 4 月	プルトニウム燃料第3開発室の運転開始
平成元年 5 月	ウラン濃縮原型プラント全面操業開始
平成 2 年 11 月	東海再処理施設使用済燃料再処理量が累積500トン達成
平成 6 年 4 月	高速増殖原型炉「もんじゅ」初臨界
平成 7 年 2 月	ガラス固化技術開発施設(TVF)で国産ガラス固化体第1号完成
平成 7 年 8 月	「もんじゅ」初発電
平成 7 年 12 月	「もんじゅ」ナトリウム漏えい事故発生
平成 8 年 9 月	ウラン濃縮原型プラントで回収ウランの再濃縮試験開始
平成 9 年 3 月	東海再処理施設アスファルト固化処理施設で火災爆発事故発生
平成 10 年 10 月	核燃料サイクル開発機構発足
平成 11 年 7 月	FBRサイクル実用化戦略調査研究開始
平成 11 年 8 月	東海事業所「地層処分放射化学研究施設」試験開始
平成 11 年 11 月	「わが国における高レベル放射性廃棄物地層処分の技術的信頼性-地層処分研究開発第2次取りまとめ-」(2000年レポート)を原子力委員会に提出
平成 12 年 11 月	東海再処理施設運転再開
平成 13 年 9 月	ウラン濃縮技術開発終了(原型プラントでは13年間で350トンの濃縮ウラン生産)
平成 14 年 3 月	原子力緊急時支援・研修センターの運用を開始
平成 14 年 6 月	東海再処理施設使用済燃料再処理量が累積1000トン達成
平成 14 年 6 月	海外ウラン探鉱権益譲渡完了
平成 14 年 7 月	瑞浪超深地層研究所着工